

# 令和3年度普及指導活動成果事例

令和4年11月

青森県農林水産政策課

	ページ
<b>東青（管轄市町村：青森市、平内町、外ヶ浜町、今別町、蓬田村）</b>	
1 「青天の霹靂」の安定生産と食味のレベルアップ	1
2 トマト指定産地の生産力向上	2
3 農山漁村女性の意欲・能力を生かした起業活動の推進	3
4 地域経営を担う集落営農組織等の法人化と経営改善支援	4
<b>中南（管轄市町村：弘前市、黒石市、平川市、藤崎町、大鰐町、西目屋村、田舎館村）</b>	
1 中南型産直モデルの確立と産直間の連携強化による地産地消の推進	5
2 需要に応える「青天の霹靂」の生産と新品種の普及拡大	6
3 りんご黒星病被害防止に向けた総合防除対策の推進	7
4 中南地域の果樹経営に適した特産果樹の生産拡大	8
5 ハウスを有効活用した中南地域農業労働力補完モデルの育成	9
6 多様な農業・地域活動にチャレンジする女性農業者の育成	10
7 共助・共存の農山漁村づくりに向けた地域経営体の育成	11
<b>三八（管轄市町村：八戸市、三戸町、五戸町、田子町、南部町、階上町、新郷村）</b>	
1 地域で支える新規就農者の育成・確保	12
2 農山漁村女性を中心とした活力ある地域づくり	13
3 「ジュノハート」のブランド化に向けた良品生産の拡大	14
4 ながいも産地の維持に向けた担い手の育成	15
5 重要病害虫等に対応できるにんにく生産者の育成	16
<b>西北（管轄市町村：五所川原市、つがる市、鯨ヶ沢町、深浦町、板柳町、鶴田町、中泊町）</b>	
1 極良食味品種「青天の霹靂」の高品質・良食味生産	17
2 スマート農業を活用した大規模稲作省力作業体系の構築	18
3 中小規模稲作経営体への野菜導入による経営の安定化	19
4 シャインマスカットの産地育成	20
5 地域経営体の育成確保と共助・共存の農山漁村づくり	21
6 地域をリードする農山漁村起業の推進	22
<b>上北（管轄市町村：十和田市、三沢市、野辺地町、七戸町、六戸町、横浜町、東北町、六ヶ所村、おいらせ町）</b>	
1 生産力の向上によるながいも産地力の強化	23
2 優良種苗供給体制強化によるにんにく産地の再構築	24
3 労働力不足に対応したスマート農業の普及拡大	25
4 大豆の安定生産と省力・低コスト技術の導入による収益性の向上	26
5 TMRセンターを核とした酪農経営支援	27
6 新規就農者の定着と経営基盤の強化	28
7 共生社会を支える女性人財の育成と産直組織の新たな取組拡大	29
<b>下北（管轄市町村：むつ市、大間町、東通村、風間浦村、佐井村）</b>	
1 新規就農者による「夏秋いちご」の産地力強化	30

# 1 「青天の霹靂」の安定生産と食味のレベルアップ

## 【概要】

東青地域「青天の霹靂」生産指導プロジェクトチームが生産者や関係機関と情報共有し、各農家が生産目標を達成できるように個別指導を通して、生産者の生産意欲向上と安定生産を目指した。

## 【背景・課題】

全作付者の出荷データを分析する中で、生産目標を下回る生産者が固定化してきていることが分かった。そこで、作付者全員に栽培ポイントを示した「生産者カルテ」の配布と、生産目標を下回った生産者への個別指導により、各ほ場ごとの特徴を吟味した栽培方法の改善、気象変動に対応した栽培管理ができるように指導する必要があることがあった。

## 【普及指導活動の内容】

- 東青地域「青天の霹靂」生産指導プロジェクトチームを通して、各関係機関と連携を強化するための連絡会議を開催し、今年度行う活動内容を決定し意識統一を図った。
- チーム員の追肥指導に当たっての技術統一と、今年の管内の生育状況の情報共有のための現地検討会を開催した。検討会終了後、チーム員で各生産者に対して、幼穂形成期以降の栽培管理について指導を行った。
- 育苗期、追肥時期、稲刈時期に講習会を開催し、各ほ場にに応じた栽培管理について指導を行った。

## 【成果】

- 玄米タンパク質含有率（6.4%以下）について全員が出荷基準を達成した。
- 生産目標のうち玄米タンパク質含有率（6.0%以下）の割合は74.1%となり令和2年度の20.9%から大幅に改善した。

## 【対象名】

- 青森農協「青天の霹靂」生産者部会（45名）
- 青森県米穀集荷協同組合「青天の霹靂」作付生産者部会（2名）
- (株)KAWACHO RICE（8名）



東青地域「青天の霹靂」プロジェクトチームの現地検討会

## 2 トマト指定産地の生産力向上

～省力的な誘引方法の導入支援と新規作付者の育成支援～

### 【概要】

省力・低コスト化に有効な2本仕立てUターン誘引栽培の導入支援を行った。また、新規作付者が増加しているミニトマト部会に対しては、個別成績表を基に個々の課題解決を支援した。

### 【背景・課題】

- 管内のトマトは、高齢化や労働力不足等により栽培面積が減少している。一方ミニトマトは一戸当たりの栽培面積が増加傾向にあり、どちらも省力・低コスト化が課題となっている。
- ミニトマトは新規作付者が増加しており、生産者間の収量・品質のバラツキが見られている。

### 【普及指導活動の内容】

- 2本仕立てUターン誘引栽培の実践農業者は場での栽培講習会や冬期講習会等で誘引方法や省力・低コストにつながることを周知した。
- トマト「桃太郎ワンダー」の指導情報や栽培講習会等で天候に対応した栽培管理技術を指導した。
- ミニトマトについては、個別成績表を基にした個別巡回指導や先進農家との情報交換会を実施した。

### 【成果】

- 令和3年度の2本仕立てUターン誘引栽培の導入戸数は、令和2年度より1戸増えて35戸となった。
- 夏季の遮光対策に23名が取り組み、落花や軟果等の発生が抑えられた。
- ミニトマトの作型や品種の組合せによる出荷時期の調整や病害虫対策など、個々の生産者が前年の課題に取り組み、出荷量は前年より19 t増加し214 tとなった。

### 【対象名】

- 青森農協トマト部会(97名)
- 青森農協ミニトマト部会(28名)



トマト栽培講習会



ミニトマト個別巡回指導

### 3 農山漁村女性の意欲・能力を生かした起業活動の推進

#### 【概要】

現地巡回や聞き取り調査等により、農山漁村女性による起業の活動状況や課題を整理した。

また、課題解決に向けて、事業の活用や個別指導等に取り組み、女性起業の経営力向上を図った。

#### 【背景・課題】

- ・ 地域活性化につながると期待されている女性起業等について、活動を継続していくための経営力向上が課題となっている。
- ・ 新たに起業活動に取り組む組織に対しては、加工技術や知識の習得のほか、マーケティングなど、経営発展に向けた支援が必要となっている。

#### 【普及指導活動の内容】

- ・ 産直組織「浪岡アップル友の会」の高齢化対策として、県事業の活用による集荷システムの実証に取り組んだ。
- ・ 「平内町若手農業者の会」について、町の新たな特産品づくりに向けて、関係機関と連携して地元産枝豆を使った冷凍枝豆の開発に取り組んだ。
- ・ 「企業組合なみおか豆や」については、経理業務の見直しを支援した。
- ・ 外ヶ浜町の2組織に対し、既存商品の販売促進や品揃えの充実を目指し、食品表示や加工技術に関する指導を行った。

#### 【成果】

- ・ 産直組織による集荷システムの確立や商品化を目指した活動体制、加工技術の習得が図られた。
- ・ 外ヶ浜町の2組織は、地域産品を活用した新商品が3品開発でき、売上向上と品揃えの充実につながった。

#### 【対象名】

農山漁村女性、起業組織等、外ヶ浜町農業・農村活性化協議会（あじさいの会18名）、外ヶ浜町上小国いきいき地域づくり検討会（10名）



集荷に係る打合せ  
(10/14：青森市)



「あじさいの会」味噌販売  
(10/30)

## 4 地域経営を担う集落営農組織等の法人化と経営改善支援 ～集落営農法人の設立に向けた合意形成と法人化後の経営支援～

### 【概要】

- 法人化を検討している2つの営農組合役員に対して法人化に向けた合意形成を促した。
- 災害や経営環境等の変化に対応できるように事業継続計画（BCP）の策定を支援し、集落営農法人の経営強化を図った。

### 【対象名】

- 南後潟営農組合（45戸）
- 西田沢営農組合（60戸）
- 東青管内の集落営農法人（13法人）

### 【背景・課題】

- 任意の転作組合である南後潟営農組合と西田沢営農組合は、役員の一部が法人化を志向してきたが、組織全体での合意形成には至っていない。
- 法人化後の集落営農組織においても、担い手人財の確保や経営力強化などの共通課題を抱えており、将来の事業継続に不安を抱えている。

### 【普及指導活動の内容】

- 南後潟営農組合と西田沢営農組合の役員等に法人化の意向を確認しながら、組織内での合意形成と法人化の機運の醸成を図った。
- 集落営農法人の持続的な経営発展のための労災制度加入や万が一に備えたBCPの作成等を誘導した。
- 米価の下落や経営所得安定対策の運用見直しなどに対応するための集落営農相談会を開催した。
- 外ヶ浜町の広域連携法人（株）アグライズ外ヶ浜での生産性向上を目指して、排水対策施工機（カットブレイカー）と大豆選別機の事業導入を支援した。

### 【成果】

- 南後潟営農組合での水稻生産を含めた法人化については、組織内の合意形成が進展していないことに加え、米価下落などが予想された状況もあって、本年度の法人設立を見送った。また、西田沢営農組合では、転作そば単作での法人設立のメリットが少ないことから、具体的な検討には至らなかった。
- BCP作成や集落営農相談会を通じて、集落営農法人に関わる経営リスクを認識・予測し、事前対応の徹底と早期の復旧・改善に向けた効果的な実践行動の洗い出しができた。
- 集落営農組織が主体となった、戦略的な水田活用の一層の強化が求められていることから、法人設立等への支援を継続する。



# 1 中南型産直モデルの確立と産直間の連携強化による地産地消の推進

～産直施設が抱える課題解決で、認知度・販売額向上により地産地消を推進する～

## 【概要】

産地直売施設協議会を設置し、連携体制を強化した上で、地域特性を生かした新たな産直施設モデルの実証と産直施設が連携したPR活動の実施により、地域の活性化と地産地消を推進した。

## 【背景・課題】

- 管内産直施設では、約7割が65歳以上で、運転が困難や袋詰めに手が回らないなどの増加により出荷量が減少していることから、新たな体制が必要となっている。
- 管内には産直施設の協議会組織がないため連携が希薄であり、共通課題に連携して対応する組織が必要である。

## 【普及指導活動の内容】

- 18産直施設と農協、市町村等で組織する協議会を設置し連携体制の強化を図った。
- 障がい者がキャベツ等9種の野菜の袋詰めやテープ巻きを行い、産直施設の「農福連携コーナー」で販売した。（農福連携モデル実証）
- 産直施設が連携したPR活動スタンプラリー、産直マップの配付、地域FM放送による産直レポート等を実施した。

## 【成果】

- 農福連携モデルの実証
  - 障がい者の仕事は丁寧で、きれいに袋詰めされた野菜は、よく売れた。作業速度は、慣れるにしたがい格段に向上した。
- 産直施設が連携したPR活動
  - FMラジオを聞いて来店するお客もあり、放送の効果が見られた。
  - 行ったことのない産直へ行くきっかけとなったとの声が多かった。

## 【対象名】

管内18産直施設



福祉事業所の袋詰め作業の様子



作成した産直マップ



スタンプラリー景品  
(買い物バック)

## 2 需要に応える「青天の霹靂」の生産と新品種の普及拡大 ～「青天の霹靂」の作付面積拡大と、新品種の本格デビューに向けて～

### 【概要】

- 青森県産のブランド品種「青天の霹靂」の良食味・高品質生産の支援と面積拡大により、需要に見合った供給量の確保を図った。
- 新品種「はれわたり」の普及拡大に向けて、品種特性の把握と生産者への周知を図った。

### 【背景・課題】

- 「青天の霹靂」は、県産のブランド米として実需者や消費者から高い評価を得ているが、需要に見合った供給量が確保されていない。また、令和2年産は、出荷基準達成率が平成30年産並の低い水準となった。
- 令和5年から本格作付が予定される新品種「はれわたり」は、品種特性の把握と生産者への周知が必要である。

### 【普及指導活動の内容】

- 「青天の霹靂作付拡大運動」（6～9月）として経営面でのメリットを強調したチラシを配布し、啓発した。
- 中南地域「青天の霹靂」生産指導プロジェクトチームでは、連絡会議の開催、生育観測ほの設置、生産情報の提供、現地講習会の開催により、関係機関や生産者と情報共有を図った。
- 令和2年産の出荷基準未達成者に、適切な肥培管理について、生産情報の提供と個別巡回を行った。また、「青天ナビ」を活用した作付ほ場の確認、適期刈取りを指導した。
- 試作ほ等を設置・調査し、県をはじめとした関係機関や担当農家とデータを共有した。

### 【成果】

- 「青天の霹靂」の経済的な有利性が浸透してきたことから、令和4年産の作付見込み面積は1,410haで、令和3年産より199ha増加した。
- 出荷基準達成率は99.6%で、昨年（92.0%）を上回った。
- 「はれわたり」については、栽培しやすく胴割れが発生しにくい特性が確認でき、担当農家や関係機関と情報共有が図られた。

### 【対象名】

- 中南管内「青天の霹靂」作付経営体（350経営体）
- 新品種作付意向農家（3名）



第1回連絡会議（4/30）



田植の様子（5/15）



適期追肥講習会（7/5）



### 3 りんご黒星病被害防止に向けた総合防除対策の推進 ～落葉収集等の耕種的防除と効果的な薬剤散布の方法の実証～

#### 【概要】

りんごの総合防除対策の普及を図るため、講習会等に加え、省力的な落葉収集方法の実演・展示や効果的な薬剤散布方法の実演会により普及を図った。

#### 【背景・課題】

- 重要病害である黒星病の被害軽減のためには、総合的な防除対策が必要である。
- 特に、落葉収集機による省力的な越冬落葉の収集や散布ムラが少ない薬剤散布方法を早期に普及する必要がある。

#### 【普及指導活動の内容】

- 落葉収集機による省力的な落葉処理の展示ほを弘前市黒滝に設置し、落葉処理作業を実演会で公開して落葉収集処理を啓発した。
- 効果的な薬剤散布方法の実演・検討会を開催し、散布ムラが発生しやすい場所を確認し、散布ムラの改善策を検討して技術の向上を図った。
- 講習会や生産情報及び地域FM放送での情報発信により適期防除等の総合防除対策の普及を図った。

#### 【成果】

- 実証試験や実演会、講習会等の普及活動により総合防除対策について取組が拡大し、本年10月時点での黒星病被害果率は0%と発生を抑えこむことができた。
- なお、落葉収集機は令和4年3月から販売開始されている。

#### 【対象名】

管内7りんご共防連（318共防）



省力的な落葉収集実演会



効果的な薬剤散布方法実演会



黒星病総合防除対策の講習会

## 4 中南地域の果樹経営に適した特産果樹の生産拡大 ～シャインマスカット・ジュノハートの高品質果実生産の推進～

### 【概要】

関係機関・団体と連携して、ぶどう「シャインマスカット」及びおうとう「ジュノハート」の基本的生産技術の習得等に向けた支援を行い、高品質果実の安定生産を図った。

### 【背景・課題】

- 近年、シャインマスカットの新規作付者が増加しているため、無核処理や花穂の整形等の基本技術の普及が急務である。
- ジュノハートは県がブランド化を進めているため、県のブランド化推進協議会が設定した品質基準や出荷規格を周知徹底し、高品質大玉生産を推進する必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 落葉収集機による省力的な落葉処理の展示ほを弘前市黒滝に設置し、落葉処理作業を実演会で公開して落葉収集処理を啓発した。
- 効果的な薬剤散布方法の実演・検討会を開催し、散布ムラが発生しやすい場所を確認し、散布ムラの改善策を検討して技術の向上を図った。
- 講習会や生産情報及び地域FM放送での情報発信により適期防除等の総合防除対策の普及を図った。

### 【成果】

- シャインマスカットは、未開花現象の発生面積が増加せず、発生園では対応策を実施したことにより、出荷量は前年の16.3トンから29.5トンに増加した。
- ジュノハートは、管内の登録生産者ら4名が出荷した（出荷量：約48kg）。また、出荷者のうち1名が上位等級品である「青森ハートビート」を産地市場に出荷した。

### 【対象名】

弘果シャインマスカット作付者(95名)、JAぶどう生産者協議会(中南地区100名)、おうとう「ジュノハート」ブランド化推進協議会登録生産者(17名)



講習会風景（シャインマスカット）



「ジュノハート」着果状況

## 5 ハウスを有効活用した中南地域農業労働力補完モデルの育成 ～若手農業者と集落営農組織とのWin-Winな関係構築を目指して～

### 【概要】

集落営農組織が所有する夏期遊休ハウスを若手農業者が活用し初期投資の軽減を図るとともに、若手農業者が集落営農組織へ労働力を提供し労働力を補完するモデルの創出に取り組んだ。

### 【背景・課題】

- 管内では、労働力不足により営農に支障をきたしている集落営農組織が増加している。
- 一方、施設栽培に取り組む若手農業者は、多大な初期投資が経営安定の障害となっている。

### 【普及指導活動の内容】

- 集落営農組織（54組織）と若手農業者（77名）を対象に実施した営農状況や夏期遊休ハウスの貸借に関する意向調査結果を基にマッチングを行い、貸付条件等話し合いを行う場を設定した。
- 施設栽培に取り組む若手農業者の初期投資軽減を図るため、パイプハウスの建て方に関する資料提供等での意識啓発を図ったほか、パイプハウス自力施工の研修会を開催した。

### 【成果】

- マッチングの実施に当たっては、新規就農者の営農拠点からの移動距離及び作物品目に加えて、ハウスの設置環境（ハウスの間口、土壌（特に、水はけ状況）、水源（井戸水））を事前に確認する必要があることが分かった。
- 若手農業者3名が集落営農組織のハウスを利用して、弘前市（ピーマン）及び平川市（パクチー、ミニトマト）で野菜生産に取り組む一方、ハウスのビニール被覆作業や水稻育苗箱運搬・設置、ハウス周りの除草などの集落営農組織の作業を手伝った。
- パイプハウスの自力施工に取り組む若手農業者が新たに7名増加し、19名となった。

### 【対象名】

- 管内集落営農組織（54組織）
- 野菜栽培に取り組む若手
- 農業者（77名）



若手農業者による労働力の提供



パイプハウス建て方研修会の様子



## 6 多様な農業・地域活動にチャレンジする女性農業者の育成 ～地域活性化に向けた女性農業者の新たな取組への支援～

### 【概要】

地域の活性化を図るため、女性起業家等を対象にセミナーを開催したほか、「農のふれカフェ」実践者を対象に、個別指導や情報交換会を行った。また、女性起業家の地域共生社会の実現に向けた地域活動を支援した。

### 【背景・課題】

- 加工や消費者交流活動に取り組む女性起業家は、経営発展に向けた新たなサービスや商品開発、活動のPR等による起業活動の強化が課題となっている。
- 女性起業家の高齢化による後継者育成や、若手農業者等の起業開始に向けた支援が必要である。

### 【普及指導活動の内容】

- 女性起業家や起業に関心のある女性農業者等を対象に、優良事例や衛生管理手法を学ぶセミナーを開催した。
- 「農のふれカフェ」実践者に対し、カフェ会議（情報交換会）の開催や個別指導により、体験メニューづくり等を支援した。
- 地域課題に応じた活動を行う女性起業家に対して、活動プランの作成や新たな取組に対する支援を行った。

### 【成果】

- 「農のふれカフェ」実践者が1名増えた。また、1名が新しい体験メニューの提供を開始した。
- 女性農業者3名が、地域資源を活用した加工や収穫体験の受入れを開始した。
- 地域共生社会の実現に向け、女性起業家1名がコンビニエンスストアと連携した出張販売や、昨年度整備した交流スペースを活用した体験イベントを開催した。

### 【対象名】

- 女性起業家（53名・組織）
- 起業活動に関心のある女性農業者（20名）
- 「農のふれカフェ」実践者（10名）



コンビニエンスストアと連携した  
出張販売



漁家レストランの運営と地域活動  
について研修



## 7 共助・共存の農山漁村づくりに向けた地域経営体の育成 ～農業を核とした西目屋村活性化プランの作成支援～

### 【概要】

西目屋村全域の農業を担う農事組合法人にしめやが地域の課題を解決し、地域の農業を支えることに加えて、地域共生社会を支える経営体として成長するよう、中間支援組織と連携して、地域活性化プランの作成を支援した。

### 【背景・課題】

法人が農業を核とした地域課題解決を実践し、県内のモデル的な組織となるよう、中間支援組織等の伴走支援により、課題を掘り起こし・課題解決に向けた活性化プランの作成・実現を支援する必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 法人を伴走支援する中間組織を株式会社まちなかキャンパスとした。
- 中間支援組織が意見交換の場を設定し、法人役員や村からの意見の聞き取りに同席した。
- 法人役員が「子や孫のために村を存続させたい」という発言に同調する声を踏まえ、活性化プランのテーマを「子や孫のため」とした。
- 中間支援組織に同行し、農外のキーパーソンからの意見聴取を行った。
- 新型コロナウイルス感染症で十分な話し合いができなかったため、農業と農外、農業と若い世代の話し合いを引き続き行い、農業から解決できる課題を探ることとした。

### 【成果】

- 農業を核とした「地域活性化プラン」の原案が作成された。
- 活性化プランのブラッシュアップとともにその実現に向けた支援を次年度に取り組む

### 【対象名】

農事組合法人にしめや（117戸）



中間支援組織と（農）にしめや役員等との意見交換会(12/18)



中間支援組織へ法人の車庫・ソバ選別所を案内

## 1 地域で支える新規就農者の育成・確保

### 【概要】

新規就農者の確保や定着に向け、地域ぐるみの支援体制づくり、作物の栽培技術・経営管理等の習得による所得向上及び新規就農者のネットワークづくり等の支援を行った。

### 【背景・課題】

- 三八地域では、新規就農者の約7割が非農家出身であるため身近な人から農業の基礎を学ぶことができない場合が多い。
- そのため、市町村等との情報共有を図りながら、地域の実情に即した支援を行い、早期の経営安定・定着を促進する。

### 【普及指導活動の内容】

- 支援体制整備に向け、管内市町村や農業委員会、農協、ViC・ウーマン、青年農業士、4Hクラブ員による「新規就農者定着支援連絡会議」を開催した。
- 3名の新規就農者のほ場に、栽培実証等を目的とした「収益力アップチャレンジ農場」を設置し、現地研修会を開催した。
- 新規就農者のフォローアップのため、農業機械の保守・点検、有機栽培の取組、ECサイト活用による販売方法についてのセミナーを開催した。
- 自ら生産した農産物の販路拡大やPRを目的とした「三八ファーマーズマーケット」の実施のため、むつ市の「しもきたマルシェ」の視察研修と、先進事例である「あおりマルシェ」の取組について研修した。

### 【成果】

- 新規就農者の現状と課題、支援の必要性等について共通認識を持つことができた。
- フォローアップセミナー及び現地研修会を開催した結果、参加率が高く、参加者同士の交流も図ることができた。
- 「三八ファーマーズマーケット」の参加希望者もおり、開催への意欲が高まった。

### 【対象名】

農業次世代人材投資資金（経営開始型）交付対象者（56名）、同交付終了者（135名）



新規就農者定着支援連絡会議（6/11）



収益力アップチャレンジ農場  
現地研修会（ピーマン、8/20）



新規就農者ネットワークづくり  
セミナー（1/19）



## 2 農山漁村女性を中心とした活力ある地域づくり

### 【概要】

地域の課題解決につながるコミュニティ活動プランの策定に向けて、策定者の掘り起こしや、課題整理及び活動方向等について検討会等を開催し、4組織でプランを策定した。

また、昨年度に引き続き、モデル活動に取り組んだ組織では、異業種と連携しながら、古民家を拠点とした地域交流の場づくりに向けて、世代間交流を含む親子イベントを5回開催した。

### 【背景・課題】

- 産直組織や女性起業家、V i C・ウーマン等は、食文化の伝承や地域貢献活動など地域に根ざした活動に取り組んでいるが、高齢化や担い手不足等の地域の課題に対する具体的な取組は少ない。
- そのため、地域の課題を明らかにし、異業種との連携により、地域ごとの課題解決に向けた取組を支援する。

### 【普及指導活動の内容】

- コミュニティ活動プランの策定に向けた管内市町村等との検討会の開催や、V i C・ウーマンや若手女性農業者等を対象に、プラン策定への意識啓発に向けたセミナーを開催した。
- コミュニティ活動プラン策定者を対象に、地域課題の整理や課題解決への取組方法について検討会等を開催した。
- 異業種と連携したモデル活動については、年間を通したイベントの計画作成や世代間交流への取組などを支援した。

### 【成果】

- 活動プランは、検討会等により取組課題が整理されたことで、4組織で策定できた。
- モデル実証組織では、古民家を拠点とした地域交流の場づくりに向けて、取り組んだ。
- 地域の高齢者を活用した世代間交流にも取り組み、親子イベントを5回開催し、高齢者の生きがいづくりと、若い世代への地域文化を伝承する場となった。

### 【対象名】

- 管内産直施設(15施設)
- 三八V i C・ウーマンの会(40人)
- 青森ごのへグリーン・ツーリズム協議会(17人)
- 管内女性起業体(54)
- 女性リーダー(2人)



農山漁村女性リーダー活躍推進  
セミナー (1/18)



田子町V i C・ウーマンの会との  
活動プラン作成に向けた検討会  
(12/10)



親子イベントでの世代間交流の様子  
(8/22)

### 3 「ジュノハート」のブランド化に向けた良品生産の拡大

#### 【概要】

「ジュノハート」のブランド化に向けて栽培技術の普及に取り組み、凍霜害がかなり多く見られたので結実と品質の確保を重点的に指導した。結実は全般的に少なかったが、授粉の徹底により確保した園地も見られ、農協等の出荷量は前年並を確保した。

#### 【背景・課題】

- 「ジュノハート」は令和2年に県外販売が開始され、ブランド化に向けて良品生産の拡大が必要である。
- 若木が多く、生産量が増加していくので、栽培技術の普及が必要であり、着色不良や障害果等の対策が求められている。
- 系統出荷以外は品質検査が行われず、出荷規格が一部で守られていないので、規格の周知と遵守が必要である。

#### 【普及指導活動の内容】

- 講習会や生産情報発行により、凍霜害対策、適正管理の指導、出荷規格の周知を行った。
- 生育観測ほを5園地に設置して、生育状況や障害果の発生状況等を調査し、講習会等で活用した。
- 着色ムラの解消に向けて現地実証ほ（調査研究）を1か所設置した。
- 出荷規格の遵守や系統出荷の増加に向け、JA八戸と連携して農家を10戸リストアップし、巡回指導を行った。
- 栽培技術の底上げを図るため、篤農家8戸の優良事例集を作成した。
- 生産者代表と関係機関を参集して、来年産に向けた生産対策会議を開催した。

#### 【成果】

- 結実状況は、凍霜害により全般的に少ない傾向であったが、授粉の徹底により例年並に確保した園地もみられた。
- 生育観測ほの調査により障害果の発生状況を把握し、当面の対策を作成した。
- 系統出荷者は前年より2名増加の15名、「ジュノハート」出荷量は、JA八戸391kg（前年400kg）、南部市場135kg（同154kg※規格外含む）であった。

#### 【対象名】

おうとう「ジュノハート」ブランド化推進協議会登録生産者 117名



栽培講習会（4月）



適正着果研修会（5月）



生産対策会議（1月）



## 4 ながいも産地の維持に向けた担い手の育成

### 【概要】

ながいも産地の作付面積及び出荷量を維持するため、担い手となる若手生産者を対象に優良種苗の利用促進や栽培技術の向上による単収向上、個々の課題解決や省力化技術・機械の導入推進等を図りながら、規模拡大を実践できる担い手の育成に取り組んだ。

### 【背景・課題】

- ながいも作付面積及び栽培人数は、栽培者の高齢化により年々減少している。産地を維持するために、担い手としての若手生産者の単収向上と省力化等の推進により作付面積拡大が必要である。
- しかし、規模拡大のためには地域性や経営形態等個別で異なる課題を解決していく必要がある。また、単収向上のためには、種子の自家増殖から優良種苗への更新を図っていく必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 優良種苗増殖展示ほを活用した現地検討会や栽培講習会を4回開催した。
- 労働力不足に対応した省力機械の実演会を1回開催した。
- 単収向上と規模拡大を担う若手生産者の課題と要望事項を把握するため、意向調査を実施した。

### 【成果】

- 優良種苗更新による品質向上について、実証ほや研修会を実施したことにより新たに2名が優良種苗を導入し、更新を行った。
- 8月中旬以降の低温によるボリューム不足が多かったが、適期追肥や病害虫防除等を指導した結果、平年並の収量が確保された。
- 労働力不足への対応した省力機械として、パワーアシストスーツを実演した。体験した若手研究会員は、腰痛を軽減できるため購入に前向きな意向を示した者もいた。

### 【対象名】

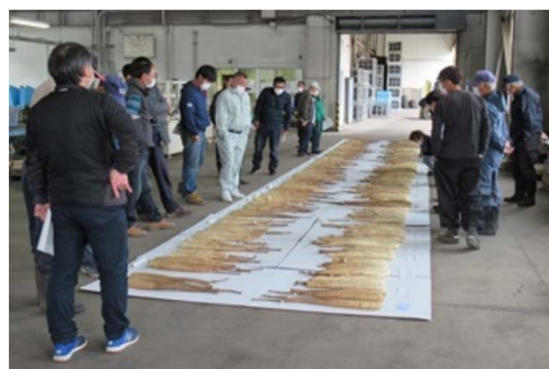
- 八戸農協野菜総合部会
- ながいも専門部
- ながいも若手研究会 49名



小切片増殖ほ場を見学する若手生産者



アブラムシ忌避マルチによる  
ウイルス低減効果の実証



坪掘り調査

## 5 重要病害虫等に対応できるにんにく生産者の育成

### 【概要】

重要病害虫等に対応できるにんにく生産者を育成するために、生産者が見て分かりやすい資料を作成し、個別巡回指導時に活用するとともに、優良種苗の確保のため、種苗増殖専用ほ場の設置に向けて取り組んだ。

### 【背景・課題】

- チューリップサビダニ、イモグサレセンチュウは被害が分かりにくく、自覚がないまま被害が拡大しているため、生産者段階での被害の有無を認知させる対策が重要である。
- 種苗増殖ほ場は、隔離され、専用での設置が重要であるが、分離しておらず、また適正な管理が行われていない実態があるので改善する必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

- 生産者個人の種子増殖専用ほのウイルス検査を農協と合同で行い、ウイルス症状の見分け方や抜取りの重要性、アブラムシ類やチューリップサビダニがウイルスを媒介していることを「にんにくの種苗増殖のポイント」を用いて指導した。
- 個別訪問では、「にんにく乾燥チェックリスト」の項目を確認するとともに、サーモグラフィーや水分計で送風面の温度や水分率を見える化した。その上で送風ダクトの高さ調整やコンテナの上下間の入替えを指導した。
- 講習会の際に「にんにく栽培に関するアンケート」を実施した。

### 【成果】

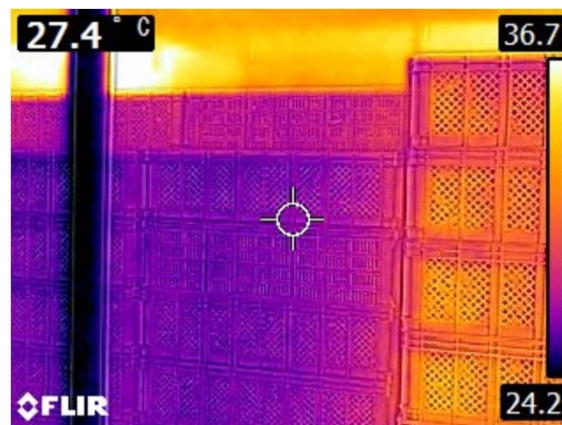
- ウイルスに感染している株は抜き取るか、感染が怪しいものは種苗としないように印を付け、収穫後は優良種苗と区別することが理解された。
- 乾燥時の高水分の改善や高温障害回避が図られた。
- アンケートに回答した生産者全体の50%が種子増殖専用ほ場を設置していること、労働力が不足している作業は「収穫」次いで「植付け」であることが明らかとなった。

### 【対象名】

- 八戸農業協同組合
- にんにく専門部
- 五戸支部西部（182戸）
- 田子支部（153戸）



ウイルス検査（5月下旬）



サーモグラフィーでの見える化



# 1 極良食味品種「青天の霹靂」の高品質・良食味生産

## 【背景・課題】

- 前年の令和元年産は適切な栽培管理と好天に恵まれ、出荷基準達成率は過去最高となった。
- 2年産の「青天の霹靂」の収量、食味及び品質の向上に向け、普及拠点ほや青天ナビを活用し、プロジェクトチーム（以下、PT）一丸となった生産指導を展開する。

## 【普及指導活動の内容】

「青天の霹靂」生産技術普及拠点ほを11か所、有機栽培・特別栽培実施者の指導ほ3か所を設置し、生育調査で得られたデータをPTで共有するとともに、「青天ナビ」を活用して以下の事項に取り組んだ。

- ① 育苗・追肥・適期刈取り等の講習会開催による生産者へのタイムリーな情報提供
- ② 前年度の出荷基準未達成者及び新規作付け者個々への生育診断に基づいた追肥指導
- ③ 生育データに基づいた、施肥、刈取り、病虫害防除等の個別相談

PT活動では研修会や現地巡回など7回（県民局独自5回、県合同2回）実施し、本品種の高食味・高品質生産に向けて、関係機関の意識統一を図った。

## 【成果】

西北地域の平均単収は10a当たり9.1俵で、普及指導計画の年度目標8.5俵を上回り、過去最高となった。一方、玄米タンパク質含有率は、生産目標6.0%以下の割合が28.3%で、目標の80%を下回った。また、出荷基準達成率は91.8%と過去4か年に比べ低かった。原因として、出穂期以降も土壌からの窒素供給が続いたため、玄米タンパク質が高くなったと考えられた。

## 【対象名】

「青天の霹靂」作付者（295名）



追肥講習会（鶴田町）



青天ナビを用いて適期刈取指導



PT夏季現地巡回（鶴田町）

## 2 スマート農業を活用した大規模稲作省力作業体系の構築

### 【背景・課題】

西北地域では、ヤマセを克服して高生産性稲作を支えてきた小規模経営体が高齢化等でリタイヤし、少数の大規模経営体への農地集約が進み経営規模が急速に拡大している。また、十三湖周辺ではGPS固定基地局(RTK-GPS)を利用した大区画ほ場整備が進められ、営農への利活用が期待されている。

このため、スマート農業機械を活用した大規模経営体の機械化一貫体系を構築する必要がある。

### 【普及指導活動の内容】

(地独) 青森県産業技術センター農林総合研究所、地元の(株)十三湖ファームや土地改良区、機械メーカー等とコンソーシアムを組み、以下の事項に取り組んだ。

- ① 21ha規模でスマート農業技術(自動直進田植機、自動水管理装置、農薬散布用ドローン、食味・収量センサー付コンバイン、営農管理システム、GPSレベラ、ロボットトラクタ)を実証
- ② 100ha規模を超える経営体用の経営シミュレーションに向けた栽培体系(乾田直播、密播苗、中苗)を検証
- ③ 経営実態調査(スマート農業21ha+慣行稲作126ha)を実施

### 【成果】

- スマート農業技術+密播苗区の実証規模を、前年の1ほ場1.46haの約10倍に当たる14ほ場約14.82haまで拡大して実証した結果、10a当たり労働時間は、前年の慣行(中苗14.38時間)と比べ31%減の9.91時間、収量(食味・収量センサー付きコンバイン9か所平均)は同116%の677kgを達成した。
- ドローンによる農薬散布時間は1ha当たり17.6分で、目標の20分を大幅に削減できた。
- GPSレベラによる均平作業では、レーザの混信が無く、効率的な作業が行われ、大区画水田での実演会の結果では1ha当たり127分で、均平率を92.0%から98.9%まで向上させた。
- 次年度も実演・調査し、大規模経営体向けの機械化一貫体系を構築する。

### 【対象名】

- (株)十三湖ファーム、津軽米づくりネットワーク(43名)
- 五所川原広域水田フル活用推進協議会(38名)



GPSレベラの高低差マップ(4/28)



可変施肥田植機実演会(5/21)



大区画水田での刈取りとマップ作成(8/9)

十三湖土地改良区提供(※空撮)



ロボトラの秋起し実演会(10/13)



### 3 中小規模稲作経営体への野菜導入による経営の安定化

#### 【背景・課題】

中泊町十三湖地区では基盤整備事業による大区画化と暗きよの施工により、大規模稲作経営体への農地集積が進むとともに、中小規模稲作経営体の所得確保のため高収益作物である野菜の導入が課題となっている。水田での野菜安定生産のため、複数の排水対策の組合せによる排水効果の検証や転作田に適した品目の選定に取り組む必要がある。

#### 【普及指導活動の内容】

- 基盤整備による暗きよ＋額縁明きよ＋補助暗きよ（新たな対策：カットドレーン又はサブソイラー）等、排水対策を実施した野菜導入実証ほを2か所設置し、ブロッコリー、ねぎ、とうもろこし3品目の栽培実証を行った。
- 現地検討会を4回開催（延べ150名）し、生育状況や排水対策の効果の確認、水稻作業と競合せず導入可能な品目について検討を行った。
- ブロッコリー収穫の労力軽減のため、収穫機実演会を2回開催（延べ140名）し、軽労化の実証と機械収穫による課題を把握した。
- 2月の研修会では2年間の実証ほの実績の周知とともに、転作田での排水対策をテーマに生産者が実行可能な排水対策技術について紹介した。

#### 【成果】

- 排水対策の徹底により地下水位が高い中泊町の水田でも野菜栽培が可能であることが明らかとなった。特にカットドレーンが、今後、水田での野菜導入に向けた有効な排水対策技術であることを周知した。
- 実証ほの結果から、水稻作業と競合しない品目としてブロッコリーを選定、とうもろこしは輪作体系の品目として推奨することとなった。
- 水田への野菜導入に向けた意識啓発により、新規導入経営体は、今年度3戸増加（目標2戸）した。

#### 【対象名】

- 中泊町の中・小規模稲作経営体(84戸)
- 新規就農者



ブロッコリー収穫機実演会(6/23)



現地検討会(8/21)



排水対策をテーマとした研修会(2/1)

## 4 シャインマスカットの産地育成

### 【背景・課題】

- 西北地域では、平成23年頃から消費者に人気が高い大粒種ぶどう「シャインマスカット」の導入が始まり、栽培面積が徐々に増えてつあつた。このため、県民局では、平成27年度から本品種の産地育成を目的に普及指導計画で取組を開始した。
- 翌年28年度からは、県民局重点枠事業で推進体制を強化し、栽培技術の普及、長期貯蔵技術の検討、新規導入者向け及び中・上級者向け栽培マニュアルの作成などに取り組んだ。また、りんご研究所と連携して、予備摘粒など4技術を開発することで産地形成を加速させた。
- その結果、栽培面積は平成27年の1.1haから令和元年（平成31年）には5.4haに増加した。
- JAや市場では生産量増加に強い期待があることから、技術支援を中心とした取組による栽培面積の更なる拡大が必要とされている。

### 【普及指導活動の内容】

「シャインマスカット」の高品質安定生産のために、以下の事項に取り組んだ。

- ① 産地市場や農協、市町等で構成する『西北地域りんご等果樹担当者会議』の開催（1回）
- ② 花穂整形、無核処理、摘粒、剪定など主要作業に合わせた栽培講習会の開催（24回、延べ459名）
- ③ 巡回による栽培技術の指導（73回、延べ195名）

### 【成果】

これらの取組の結果、五所川原市、つがる市及び中泊町の水田地帯では水稻育苗ハウスの有効活用で、板柳町及び鶴田町のぶどう地帯では露地で作付けが増え、栽培面積は、平成27年の1.1haから令和2年には6.6haに拡大した。

### 【対象名】

シャインマスカット生産者(87名)



栽培講習会（無核処理・中泊町）



新規栽培者向け講習会（中泊町）



## 5 地域経営体の育成確保と共助・共存の農山漁村づくり

### 【背景・課題】

- 管内の地域経営体数は88経営体(R元年度末)と増えたが、経営体の取組が高度化していないことから、各地域経営体の取組のレベルアップを図っていく必要がある。
- また、農村地域は人口減少と高齢化が進行しているため、地域経営体や地域の住民組織が連携した活動ができるよう地域運営組織の育成が喫緊の課題となっている。

### 【対象名】

- 管内の地域経営体(87経営体)
- 地域経営体候補(41経営体)
- 共助・共存の農山漁村づくりモデル地区(五所川原市内三好地区)の生産者

### 【普及指導活動の内容】

- 五所川原市、つがる市、板柳町、中泊町の各担い手育成総合支援協議会及び鶴田町の農業再生協議会に対し、「青森県型地域共生社会の実現に向けた地域経営推進事業」によるマネジメント部会の運営を支援した。
- 重点支援対象として、つがる市の(農)こしみずの「地域貢献型経営体レベルアップ推進事業」の取組を支援した。中泊町の(株)十三湖ファームは農林水産省の「スマート農業技術の開発・実証プロジェクト」モデル経営体として、実証ほの設置、スマート農業機器を活用した経営管理及び栽培指導等の支援を行った。
- 共助・共存の農山漁村づくりに係るモデル地区として「三好地区」をモデル地区に選定し、大規模稲作を営む地域経営体や、農家レストランを始めた新規就農者に集落の状況や活動状況について聞き取りを行った。



ドローン実演会の様子  
(9/10つがる市)

### 【成果】

- (農)こしみずにおいて、地域の若手農業者等に対する実演会を開催(22名)した結果、つがる市の単独補助事業や経営継続補助金を活用し、ドローンなどスマート農業を導入する経営体が増えた。
- (株)十三湖ファームでは、スマート農業の実演会が開催(3回)され、スマート農業技術の周知が進んだ。
- 19経営体が新たにレベル2、7経営体がレベル3、1経営体がレベル4にレベルアップした。管内の地域経営体数は106経営体となり地域経営の取組が強化された。
- 「三好地区」では、県の女性活躍推進関連事業を活用した支援により、三好村づくり協議会加工グループの高齢者宅への移動販売、農家レストランわらふぁーむの加工体験受入れの開始や(株)みよし野の赤菊いもの地域での産地化への取組など、地域づくりの動きが出てきている。



## 6 地域をリードする農山漁村起業の推進

### 【背景・課題】

- 西北管内の農山漁村女性による起業活動は、産直の魅力向上や都市との交流による情報発信など、地域全体の活性化につながっているほか、女性の社会参画等にも大きく寄与している。しかし、各組織においては、会員の高齢化が進んでおり、新たに取り組む若手女性農業者の掘り起こしやスタートアップ支援、経営力強化が必要となっている。
- 高齢者への配食サービスなど、地域貢献活動に取り組む女性起業も増えていることから、継続的な活動を目指して、関係機関や他産業・地域住民と連携した体制づくりが必要となっている。

### 【普及指導活動の内容】

- 女性起業活動の実態調査を行い、個々の課題や今後の支援策の整理を行った。
- 感染防止対策に関するセミナーや優良事例研修会を行い、女性起業家の経営力向上を図った。また、若手農業者が行う新たな取組に向け、機械等の導入に対して補助事業の活用など個別指導を行った。
- あわせて、地域貢献活動に意欲のある2組織に対し、地域共生モデル実証の実施を働きかけた。

### 【成果】

- 女性起業家への支援により、4件が新規に直売活動や農家レストランに取り組んだ。また、郷土料理の調理体験や収穫体験など、消費者との交流活動を4件の起業家が開始した。
- 中泊町の直売組織が健康づくりを目指した朝市等を実施するとともに、五所川原市の加工グループが高齢者への手作り総菜の移動販売に新たに取り組んだ。

### 【対象名】

- 西北管内の産直施設(30組織)
- グリーン・ツーリズム実践者(26個人、10組織)
- 農山漁村女性起業家(76経営体)



G・T研修会で実践力向上



取組紹介する若手起業家（右端）



移動販売の商品を選ぶ高齢者

## 1 生産力の向上によるながいも産地力の強化

### 【概要】

- 栽培講習会等において、種子更新、病害虫防除、生育状況に応じた追肥等による収量・品質向上を呼び掛けた結果、ながいも栽培基本技術の重要性が理解された。
- 各JAの採種ほでの現地検討会において、アブラムシ類防除やモザイク症状株の抜取りを指導した結果、優良種苗生産に向けた意識が高まった。

### 【背景・課題】

管内の令和元年産のながいも平均販売単収は2,141kg/10a、A・B品率が61.3%で、どちらも県の平均より低い状況が続いており、その要因として、種子更新率が低いことや、基本技術（植付時期、追肥の適期施用）が徹底されていないことが挙げられる。このため、優良種苗の確保及び種子更新による収量・品質の向上と、担い手農家の栽培技術向上が課題となっている。

### 【普及指導活動の内容】

- 優良種苗の確保のため、催芽切りいも利用による種苗増殖方法改善モデルの実証ほの設置、採種現地検討会による採種農家の養成、優良系統むかご採種ほ及び種子増殖ほにおけるウイルス罹病株抜取指導を行った。
- JAと連携し、収量・品質向上のための種子更新を栽培講習会等で呼び掛けた。また、「ながいもの達人」等の優良事例を収集し、営農講座で紹介した。
- 担い手農家の栽培技術の向上に向け、基本技術の徹底、クロルピクリン剤の適正使用について指導した。

### 【成果】

- 優良系統むかご採種ほ・種子増殖ほのウイルス罹病株の抜取り指導を行った結果、ウイルス罹病株の割合は基準値1%以内を達成した。
- 種子更新優良事例や野菜研究所における試験例を説明した結果、収量向上のためには種子更新が必要であることが理解された。
- 農薬散布におけるRACコードの活用や生育状況に応じた追肥等の指導により、ローテーション散布による効果的な病害虫防除や追肥量の増減の仕方が理解された。

### 【対象名】

- JA十和田おいらせ野菜振興会ながいも採種担当農家 4名
- JAゆうき青森野菜振興会種子部会 30名
- JAおいらせながいも採種生産組合 8名
- ながいも担い手育成塾生 78名



現地栽培講習



催芽切りいも準備



網室設置



## 2 優良種苗供給体制強化によるにんにく産地の再構築

### 【概要】

にんにく栽培上の重要病害虫であるウイルス病やイモグサレセンチュウ（以下、センチュウ）の被害を防止するため、生産者自らによる種苗増殖の重要性について指導した。また、収穫後の不適切な乾燥管理により煮え症状やカビの発生などの障害が散見されたため、乾燥管理の徹底を現地巡回や講習会で指導した。

### 【背景・課題】

上北地域では、センチュウ被害予防に対する認識不足により、優良種苗の確保や、種苗増殖専用ほ場の設置が伸び悩むとともに、被害発生後の体系的防除対策が不足している。また、乾燥時におけるコンテナの詰めこみのし過ぎ等による障害発生事例が散見される。

### 【普及指導活動の内容】

- 講習会において、栽培管理や病害虫防除の適期実施を指導するとともに、典型的な種苗増殖ほ場を用いて優良種苗の増殖について指導した。
- J Aと連携して病害虫や障害の診断、防除対策指導を行った。
- J A指導員と合同で乾燥期間中の巡回指導を実施した。

### 【成果】

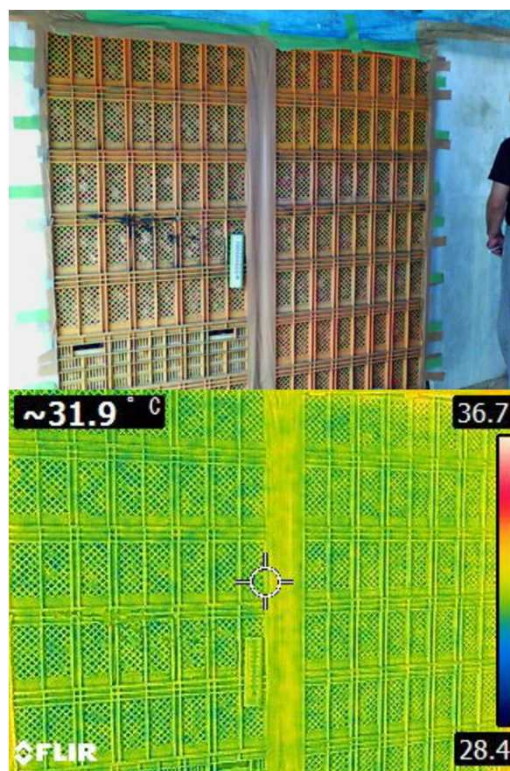
- 部会役員、営農指導員と連携してJ A部会員向け採種ほ2か所のウイルス検査を実施し、罹病率2%以内の管理基準を達成した。
- 病害虫診断依頼に対応したほか、センチュウ被害の発生が認められた生産者には、J Aと連携して防除対策について指導したほか、種子消毒やほ場選定の留意点など植付け前の対策につなげた。
- 収穫物の乾燥庫の換気状況を確認したり、赤外線サーモグラフィーを活用して温度ムラの有無を可視化して生産者に説明したことで、暖房機の配置や稼働時間など適正乾燥についての理解が進んだ。

### 【対象名】

- J Aゆうき青森野菜振興会にんにく部会 257名
- J Aゆうき青森野菜振興会種子部会にんにく部門 2名



関係者による優良種苗増殖ほ種場  
ウイルス検査



赤外線サーモグラフィーによる  
シート乾燥の状況  
(下：温度ムラがなく、適切な管理)



### 3 労働力不足に対応したスマート農機の普及拡大

#### 【概要】

労働力不足が深刻化している中で、対応策の1つとして期待される自動操舵トラクタ等スマート農機の導入を進めるため、農業者、農業機械メーカー、関係機関で構成する研究会を設置し、推進方策の策定と情報共有を行った。また、自動操舵トラクタの活用を進めるため、女性農業者や若手農業者を対象とした研修会を開催したほか、自動操舵トラクタ活用ビデオマニュアルの作成に取り組んだ。

#### 【背景・課題】

上北地域は県内トップクラスの露地野菜産地であるが、農業者の高齢化や農業就業人口の急激な減少、1経営体当たりの経営面積の拡大により、労働力不足への対応が課題となっている。

#### 【普及指導活動の内容】

- スマート農機導入経営体、関係機関・団体、農機メーカー、試験研究機関等で構成される「上北地域スマート農機普及推進研究会」の設置・運営を行った。
- 女性農業者や若手農業者を対象として、自動操舵トラクタを操作し作業する研修会を開催した。
- 野菜栽培への自動操舵トラクタの活用方法を管内農業者へ効果的に伝えるため、農機メーカー、自動操舵トラクタ導入農家の協力の下、ビデオマニュアルの作成に取り組んだ。

#### 【成果】

- 研究会の設置により、スマート農機普及拡大に向けた体制が整備され、情報共有が図られたほか、具体的な取組の方向性を示した「上北地域スマート農機普及推進方策」が策定された。
- 自動操舵トラクタ活用研修会には、延べ27人が参加し、各種作業を体験により、メリットや活用方法について理解を深めた。
- ながいも・ごぼうの植え溝掘り、にんにくのうね立てなど4作業分についてのビデオマニュアルを作成した。（ビデオマニュアルは2か年で完成）

#### 【対象名】

- 名誉農業経営士45名
- 農業経営士36名
- 青年農業士33名
- V i C・ウーマン53名
- かみきた畑美人68名
- 4 Hクラブ員45名
- 新規就農者64名



上北地域スマート農機普及推進研究会



自動操舵トラクタ活用研修会

## 4 大豆の安定生産と省力・低コスト技術の導入による収益性の向上

### 【概要】

生産情報の提供、栽培講習会の開催及び土づくり指導等により、適期作業と基本技術の徹底を支援したほか、個々の大豆栽培技術改善策整理表を作成させることにより各経営体の課題を洗い出し、個別の技術改善の取組を支援した。また、現地検討会でドローン等省力技術の情報を提供した。

### 【背景・課題】

- 大豆の収量は年次変動が大きく、安定した所得の確保が難しいことから、経営体ごとの収量低下の原因を明らかにし、経営体の実態に合わせた技術改善策を講じる必要がある。
- 担い手の高齢化や一戸当たりの耕作面積の拡大により労働力不足が進行しており、将来を見据えた省力技術の導入が必要である。

### 【普及指導活動の内容】

- 生産情報紙「だいでず通信」の発行や栽培講習会の開催により、生育調査結果に基づいた作業適期を細かに情報発信し、基本技術の徹底や適期作業の実施を支援した。
- ダイズシストセンチュウ土壌検診を実施したほか、センチュウに感染した場合の対策や予防策として、ほ場の作業順の変更や輪作等を積極的に行うよう指導した。
- 経営体ごとに大豆栽培技術改善策整理表を作成させ、整理表に基づいた技術改善を提案するとともに、技術改善を支援した。
- 省力化技術実証ほ現地検討会への参加誘導や、ドローン等の航空防除で使用可能な薬剤と散布時期の情報提供をした。

### 【成果】

- 生産情報紙「だいでず通信」は経営体の作業計画に役立てられたほか、栽培講習会をきっかけに使用薬剤や防除時期について見直すなど栽培管理の適正化が図られた。
- 7経営体が大豆栽培技術改善策整理表を作成し、うち6経営体が作業時期、防除薬剤、施肥の見直しなど自らの課題解決に取り組んだ。
- 作業の省力化を目指し、1経営体がドローンによる病害虫防除を開始した。

### 【対象名】

集落営農組織6組織、大規模生産者16戸 計22経営体



実証ほの額ぶち明きょ施工



土づくり実証ほの生育状況

## 5 TMRセンターを核とした酪農経営支援

### 【概要】

TMRの原料となる良質粗飼料の安定生産を支援した。また、デーリィサポート北栄（東北町）とデーリィサポート吹越（六ヶ所村）へTMR利用者の乳質情報を提供したほか、TMR利用者の乳量・乳質向上に向けて個別支援を行った。

### 【背景・課題】

- TMRの品質にバラツキがみられるため、原料の自給飼料を安定生産するとともに、TMRの製造に酪農家の意見を反映させる必要がある。
- TMR利用者の出荷乳量及び乳質の向上に向けて飼養管理技術の改善が必要である。

### 【普及指導活動の内容】

- 自給飼料の収量、品質向上に向けて、飼料用トウモロコシの作付体系や適期刈取等について指導した。
- ゆうき青森農協と連携し、毎月2回、バルク乳の乳質検査結果を取りまとめ、TMRセンターや飼料メーカーに提供し、問題に早期に対応できるようにした。
- 農協が実施したバルクスクリーニング検査結果を基に、乳質改善を指導したほか、飼料メーカーと連携して巡回し、飼養管理の改善を指導した。

### 【成果】

- 飼料用トウモロコシでは、すす紋病が発生したものの、例年以上の収量を確保し、適期刈取りできたことから品質の良いサイレージに調製できた。
- バルクスクリーニング検査結果を基に改善箇所を指導したところ、TMR利用者の乳質が前年度より向上した。

### 【対象名】

- デーリィサポート北栄利用者17名
- デーリィサポート吹越利用者15名



良質粗飼料生産に向けた検討会



飼料メーカーと巡回指導を実施



## 6 新規就農者の定着と経営基盤の強化

### 【概要】

新規就農者の知識・技術の向上を図るため、いきいきヤングファーマーゼミナールを開催し、栽培から経営まで幅広い知識・技術等の習得を支援するとともに、生産技術の不足等特に支援の必要性が高いと考えられた新規就農者を重点指導対象者とし、個々の課題に対応した支援を行った。また、農業次世代人材投資事業を活用し、関係機関等とのサポート巡回を通して、新規就農者に対する指導助言及び情報の共有を行った。

### 【背景・課題】

新規就農者の多くは、農業に関する知識・技術が不足し、農産物の収量品質が不安定で、さらに経営感覚も身に付いていないことから、目標となる所得を確保できていない。このため、市町村段階でのサポート体制の充実強化を図りながら新規就農者の生産技術や経営管理能力、資金管理能力の向上に対する支援を行っていくことが重要である。

### 【普及指導活動の内容】

- ヤングファーマーゼミナールにおいて、「農薬の種類や使用方法」、「土づくりや肥料計算」、「堆肥の基礎知識」などの営農基礎講座、「刈払機作業」、「VRを活用した農作業事故疑似体験」などの農作業安全研修、「複式簿記の基礎」に「パソコンを活用した複式簿記の実践」などの経営研修を行った。さらに、その地域の農業経営士や新規就農者の取組を見学し、情報交換を行う研修も実施した。
- 重点指導対象者の病虫害防除や栽培管理等の課題について、野菜研究所や農業経営士等の協力を得ながら解決を支援した。
- 日本政策金融公庫と連携し、青年等就農資金の借入相談に対応したほか、借受希望者の経営改善資金計画の作成を支援した。

### 【成果】

- ヤングファーマーゼミナールの研修において実演展示や体験などを取り入れた研修を増やしたことにより、受講者の理解をより深められ、能力向上を図ることができた。
- 課題解決に向けて取り組んだ新規就農者の多くが栽培技術等の向上を図ることができた。なお、青年等就農資金の延滞者はいなかった。

### 【対象名】

農業次世代人材投資資金受給者、就農希望者等 101名



堆肥の実物展示



農業経営士との情報交換



重点指導対象者への個別指導

## 7 共生社会を支える女性人財の育成と産直組織の新たな取組拡大

### 【概要】

地域共生社会の実現に向けた女性によるコミュニティ活動の活性化のため、地域貢献活動の担い手となり得る女性人財を育成するとともに、産直施設の販売力強化に向けた新たな取組の実証等に取り組んだ。

### 【背景・課題】

- 管内の産地直売施設は、年間販売額が31.7億円（R1）と県内6地域で最多となっているが、1施設当たりの年間販売額は伸び悩んでおり、新たな取組が必要である。
- V i C・ウーマンや生活研究グループ等は、様々な形の地域貢献活動に取り組んできているが、更なる活動の活性化が求められるとともに、地域共生社会の実現に向けて、地域貢献活動を行う女性人財の育成が求められている。

### 【普及指導活動の内容】

- 産直施設の販売力強化に向けた新たな取組に対して伴走支援を行うとともに、管内産直施設への効果の波及に向け、産直施設ステップアップセミナーを開催した。
- 産直組織や生活研究グループによるコミュニティ活動プランの作成を支援するとともに、地域ネットワークセミナーを開催し、地域貢献活動への取組の必要性について意識啓発を行った。

### 【成果】

- 「産直ビジネスモデル実証」を行う団体を公募し、(株)産直とわだ、三沢市近郊やさい生産組合、なたねの会の3団体に、移動販売や事前注文・配達販売、地場産品に付加価値を付けた商品の販売の実証を委託した結果、産直組織の新たな取組について実証された。
- 異業種と連携した地域活動を検討した結果、5グループがコミュニティ活動プランの作成に至った。
- 地域貢献活動の実践を拡大するため、一本松ひまわり生活研究グループの活動を支援した結果、試験的に地域住民への彼岸だんごや惣菜の配達販売に取り組んだ。

### 【対象名】

管内産直団体26組織、管内女性農業者（V i C・ウーマン53名、かみきた畑美人68名、かみきた農と暮らしの研究会34名、女性起業志向者等）



産直組織による移動販売



地域貢献活動の検討会



# 1 新規就農者による「夏秋いちご」の産地力強化

～1億円産地の発展を目指して～

## 【概要】

下北地域における夏秋いちごの産地力強化を図るため、新規就農者の栽培技術向上とスマート農業を活用した多収・安定生産技術の確立に取り組んだ。

## 【背景・課題】

- 下北地域では夏秋いちごの産地化が進んでいる。生産者の約3分の2が新規就農者で、その多くは非農家からの新規参入である。
- 産地の維持・拡大に向けて、新規就農者の技術力向上と経営安定化が課題となっている。

## 【普及指導活動の内容】

- 夏秋いちごレベルアップ研修会において、生育ステージに合わせた栽培管理指導、先進地視察などを行った。
- 個別巡回により、新規就農者ごとの課題について対策を指導した。
- 自動施肥かん水機の導入ほ場にスマート農業試験展示ほを設置し、生育・土壌診断に基づく施肥管理を検討した。
- 新たな販売先を確保するため、全農、十和田おいらせ農協及び市場との情報収集及び意見交換を定期的に行った。

## 【成果】

- 研修会の開催により、適期の栽培管理が行われるようになった。
- 個別巡回指導により、基本技術の習得と低位生産者の技術改善が図られた。
- 新たに出荷を開始した八戸市場の評価や問題点について情報共有し、次年度の対応が検討された。

## 【対象名】

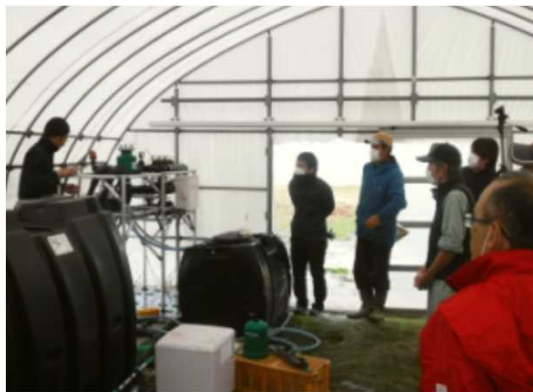
JA十和田おいらせ野菜振興会  
むつ支部いちご部会（18名）



市場を招いての農協目揃え会  
(6月8日)



夏秋いちごレベルアップ研修会  
(6月15日)



メンテナンス研修会（11月19日）